

平成31年2月1日発行 春燈/第74巻第2号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2019 February

2月号



主宰の句

安立公彦

去りやらぬ冬蝶ひとつ開戦日

十二月八日や独り書に籠もり

山眠る相見て数ふ経し月日

侘助の一木ひそと夜明け待つ

凍蝶に己が気力を分けたしや



久保田万太郎の句

西鶴忌うき世の月のひかりかな

『これやこの』昭和二十一年

昭和十七年四月から二十年十月までの二百七十句の中の一句で、前書に「いと句會にて」とある。

西鶴の辞世句〈浮世の月見過しにけり末二年〉をふまえて、「浮世」を「うき世」としている。折しも太平洋戦争の真っ只中、戦局は芳しくなくまさに「憂き世」であった。月光は、寂寞の光というより、そんな心を慰撫する優しい「ひかり」であったのではなからうか。

後藤眞由美

久保田万太郎の句

いそまきのしのびわさびの餘寒かな

『流寓抄』昭和二十二年

「福さん来る。ありあわせのものにてよくむかしの『梅ヶ枝』をおもはせるもの二品三品こしらへくれたり」と前書にある。海苔で巻いた中の山葵の辛みに余寒を感じ取っている。「しのびわさび」の巧みな使い方、味覚で捉えた余寒を表して余りある。福さんの包丁捌きに古き佳き昔を偲びながら一献かたむけておられる万太郎師のお姿が眼に浮かぶ。

坂 入 妙 香

燈下集



○ 太田佳代子

帰り花がんばりすぎを叱らるる
バスに乗らぬ人は見送り帰り花
信号に隣り合ふバス冬の雨
綿虫に焦点合はずひとりつ子
冷えわたる鏡をみがく鏡の吾

○ 久保久子

渾身の打診ながびくけらつつき
捨て舟に細波ひかる今朝の冬
ひと言にほぐるる呪縛竜の玉
石路咲くや水音びびく持仏堂
身ひとつの己諾ひ浮寝鳥

○ 廖 運 藩

○ 金山雅江

控え目な人のやさしさ花八手
晩学の気負ひ翁の忌なりけり
馬の匂ひ草の匂ひも小六月
ハロウインの魔女にもなれず落葉掃く
冬日和師の短冊のそらの色 (祝・俳句カレンダー1月号)

大根播く棚田海拔二千尺
大根播く働き盛りの喜寿の人
晩鐘の余韻嫋々秋闌くる
秋深き小耳に挟む老いの愚痴
秋深き隣は葉九層倍

○ 久米 憲子

二万歩の札所めぐりや掛大根
帰り花夢破れたり生れたり
慈母観世音菩薩御前冬紅葉
木枯や転がつて来る雀どち
底冷や含みてまろき延命水

○ 小倉 陶女

節高き指や勤勞感謝の日
三の酉ゆきもかへりも風の中
イ予と言問橋の都鳥
冬帽子人遠ざけて人恋し
朧して旅の名残りの冬紅葉

○ 荒井 慈

小春富士金婚式に乾杯す
花束をかざし駆け出す時雨かな
なつかしき文士の宿や冬紅葉
残る虫空き湯の札を裏返す
音読の上手な吾子や童の玉

○ 佐渡谷 秀一

手に二つ胡桃ころがす無聊かな
初霜や声よく通る女子野球
雲逸ることなからうに秋深し
神の留守きちんと畳む新聞紙
北窓のパソコン閉ぢぬ日短

○ 沼田 桂子

冬の雲中身濃き文もらひけり
冬めくや窓をかすめる鳥の影
立冬の米の研ぎ汁白きかな
冬のポスト確と封書の落つる音
夕映えの一瞬の美や冬の雲

○ 宮田 豊子

久々に拵ぐる空や山茶花咲く
炬開や疵も愛でらる志野茶碗
音大にモーツァルト聴く冬林檎
エスプレッソ独りの冬の朝餡かな
冬三日月尖りて胸の騒ぎけり

○ 呂 秀 文

身から出た錆もろともに蛇穴へ

痛痒の身体髪膚冬籠り

着ぶくれて階の手すりは命綱

寒紅の剥げて本性むき出しに

懐手つかみそこねし幸あまた

○ 陳 姝 蓉

木洩れ日の影やや薄く秋に入る

星屑に紛れし亡夫や夜の秋

秋蝶に安物を買うルーベかな

秘め事は日記に秘めて秋思かな

無農薬の賞賜りし文化の日

○ 井 上 正 子

子の傍が終の住処や石路の花

転居して先づは内科へマスクして

万博の善くぞ二度目や冬めけり

創作の自慢の人形聖夜劇

息子の勤め気遣ひ募る年の暮

○ 三 代 川 玲 子

新米の炊きたてご飯供へけり

姿見ぬ雀はみんな蛤に

田の神を山に帰して月冴ゆる

少年の白息天体望遠鏡

着ぶくれて詞藻の海に溺れをり

○ 豊 谷 青 峰

初冬や一刀彫の鑿のあと

吹き溜る開かずの門の落葉かな

大和路に惜しむ夕日や落葉踏む

短日や俾またせて待乳山

人望の医師の笑顔や冬ぬくし

○ 高 埜 良 子

帰去来の夢のいくたび浮寝鳥

迂回路の日だまりに咲く冬菫

冬薔薇ひとつひとつに癒えむ彩

寒菊や母のなき子に母の声

菊枯れていつも携帯人生訓

余言

安立公彦

流寓にも似たりひとりの葛湯吹き 西川 保子

「流寓」は、各地にさすらい留まること。流浪の民である。「葛湯」は小さい頃良く飲まれた。熱さの中にも、ほのかな甘味が懐かしく思い出される。

この句、「流寓にも似たり」に、葛湯への思いとともに作者の、来し方への尽きぬ感懐が感じられる。「ひとりの葛湯吹き」は、その思いを自身の現況に取り籠んでいるのだ。「ひとりの」が良く効いている。しかし表現は「葛湯吹き」と客観的である。そこにこの句の佳さを見る。

床屋出て男はどこへ桂郎忌 三上 程子

桂郎忌は十一月六日、昭和五十年六十六歳で死去している。今から見るとまだ若い。十一月本部句会の特選句。

石川桂郎は周知の通り石田波郷門。家業は理髪店。小説は横光利一門、昭和十六年『剃刀日記』を刊行、同四十九年、『俳人風狂列伝』刊行。読売文学賞受賞。この本は、昨年中央公論新社から文庫本として出版された。この句、「男はどこへ」に、石川桂郎自身の面影、更にはその行動が重なる思いがする。物語性のある句と言えよう。

冬蝶の息づく石の日のぬくみ 大嶋 洋子

冬の歳時記を見ると、「冬」を冠した昆虫は、蛾、蜂、蠅、蛇、蛙、蚊、蚤と僅かだが、夫々佳句が出ている。その中で「冬の蝶」は、春や夏の華やかな蝶とは対象的に、心象的な作品が見られる。

この句の「息づく」もその一つと言えよう。冬蝶の静寂は決して亡骸ではない。それは「石の日のぬくみ」が善く表わしている。日向に置かれた石は、折からの冬日を浴びて「ぬくみ」を感じる。冬蝶の息づきを善く支えている。

新しき生命加はる聖夜かな 高橋 和女

家族に赤ちゃんの誕生である。「新しき生命」だから悦びもひとしおだ。そして今夜はクリスマススイプ。母親に抱かれた赤子の、福ぶくしい笑みが見えて来るようだ。

「新しき生命加はる」が全てを物語っている。家族、その家、それは集う人それぞれの構成により異なるのは、一

般的には当然のこと。しかしその基は、「新しき生命」の誕生である。「加はる」という、一見客観的な表現が、この句の場合長く効いている。今年の聖夜も近い。

湯豆腐やのど越しの良き所酒 林 紀夫

「所酒」は地酒。辞書には「田舎酒」とも呼ぶとある。しかしこの「田舎酒」は、こ地酒については相応しくない。今年の勉強会は栃木市。夜の懇親会に出た酒は、土地の地酒と聞いたが、実に好い風味だった。

この句、「のど越し」という感覚表現が、如何にも「所酒」にふさわしい。つまみの「湯豆腐」もまた同じ。万太郎先生の「いのちのはてのうすあかり」の静謐さとは対象的に、「のど越しの良き所酒」には和みがある。

僧形の現に返る師走かな 本多 遊方

作者は僧職に在る。父君は春燈同人で、光明山本願寺第二十九世。平成二十八年二月三日逝去、九十四歳だった。後を継いだ作者は、連日多忙な日常なのだろう。

「僧形の現(うつつ)に返る」に、束の間ながら俗世の安堵に戻る思いが感じられる。僧職という日常は、私たち俗人には理解の外にある。然し歳末になると、良くテレビで、高名な寺院の煤払いの風景を見る。これは私たちも行う年用意の一つ。「現に返る」は言い得ている。それを受けて「師走かな」の座五が、善く一句を締めている句だ。

身から出た錆もろとも蛇穴へ 呂 秀文

「身から出た錆」はいわゆる自業自得。「蛇穴に入る」は仲秋の季語。歳時記によると、蛇が穴に入るのは秋の彼岸の頃。寒冷地はもつと早く、温暖な地域は晩秋の頃と記す。この句、蛇を擬人化しているのが面白い。冬眠のため穴に入る蛇、この蛇は自業自得の悪業を負っているのだ。それを「身から出た錆」と現す。考えてみると、人はそれぞれこの「錆」を大なり小なり身に付けていよう。

未だ記さぬエンディング帳や花八手 河崎 國代

「エンディング帳」は「エンディングノート」。辞書には、「遺書ノート」とある。いわゆる「遺言状」か。このノートは、「法的拘束力は弱いものの、自分の終末医療の選択、葬儀の希望、残される家族へ贈る言葉、自分史、葬式の案内をする親戚・友人の名簿、書類の保管場所などを自由に記して遺すもの」と解説している。

作者は手許の遺書ノートを見ながら、その記帳を思案している。高齢化の時代、既にエンディングノートの記載を終えた人も多かるう。私たちがこの世に遺す最後の文書である。庭前の八手の白い花が作者を見ている。

当月集

安立 公彦選



○ 田中嘉信

木洩れ日のあはひにひそと杜鵑草

故郷の文化消えゆく文化の日

碧天の銀杏黄葉の大樹かな

はらつばに幸せ満つる小六月

浮雲の空の青さや一の酉

○ 佐藤玲子

朝しぐれラジオ体操途中まで

どなたかな縁に金柑柚子二つ

なじみの曲流し小春の灯油売り

一人の餉レシビ通りに大根煮る

いい夫婦なりしや勤労感謝の日 美命日

○ 横山さくら

ネクタイの結び緩むる小春かな

一文字をこだはり思ふ日短

ストックの泥を払うて山眠る

客人をそつと招くや長火鉢

読み掛けの本を閉ぢゐる年の暮

○ 近藤真啓

小春日や海岸沿ひの膝栗毛

うつそみの恋は盲目冬薔薇

二人抜け四人加はる焚火かな

昇進の友の白髪おでん鍋

天狼やシニアグラスを使ひみむ

○ 石原節子

不覚にも入院となり神無月

朝寒や看護師の手のあたたかし

点滴の落つるに見入る小春かな

小春日や優しきナースに囲まれて

病室に日差しあふるる師走かな

春燈の句

安立 公彦選

山の名も子の名も摩耶や初紅葉
孫帰京のその日の紅葉日和かな
持ち古りし辞苑のほつれ文化の日
喪の家の窓の玻璃打つ小夜時雨
白垂紀の溪は真紅に秋深し
大銀杏小鳥の群るる昼下り
天平の道や落葉を踏み分けて
オリオンの短剣きらら冬に入る
二世帯の住む中庭の石路の花
晩年は身軽であたし冬木立
黒猫の空き家住まひや花八手
わが影を長く映すや枯野道
秋灯のまたたく伊根の漣標舟後二句
海に浮く伊根の舟屋の秋灯

東京 遠藤 レイ

栃木 渡邊 清央

京都 村上 國枝

島根 土江 比露

美男葛熟るる生垣残りをり
暖れし声落とす湖岸の寒鴉
先づ団地焼諸売りの名調子
天領の山脈眠る日和かな
ヘルパーの吟味のおでん母の味
ともかくも介護四年の師走かな
菊膾母との記憶遙けしや
散策の肩へ銀杏受けにけり
トタン屋根打ちて櫛の実ころげ落つ
木守柿鴉の高見ゆるしけり
銀座にも寂しさのあり寒き夜
ながき冬はじまる前に植木刈る
あらたまやあるやなきかのわが余生
初暦改元待ちの気の揺るぎ

福島 室井津与志

栃木 佐藤 忠

東京 鈴木としお

